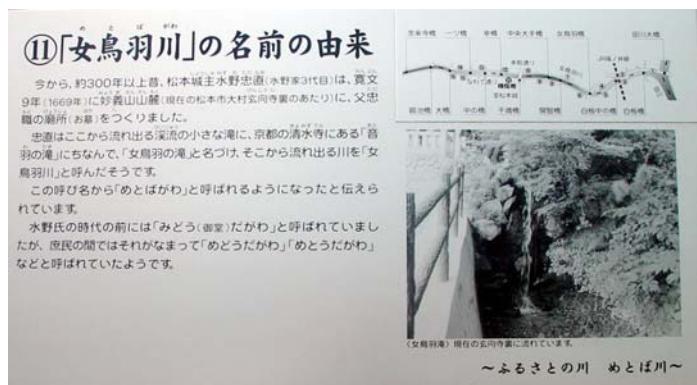


<h1>ガイド</h1>	<h1>女鳥羽川の歴史</h1>
--------------	------------------

○ いつから女鳥羽川と呼ばれるようになったか。

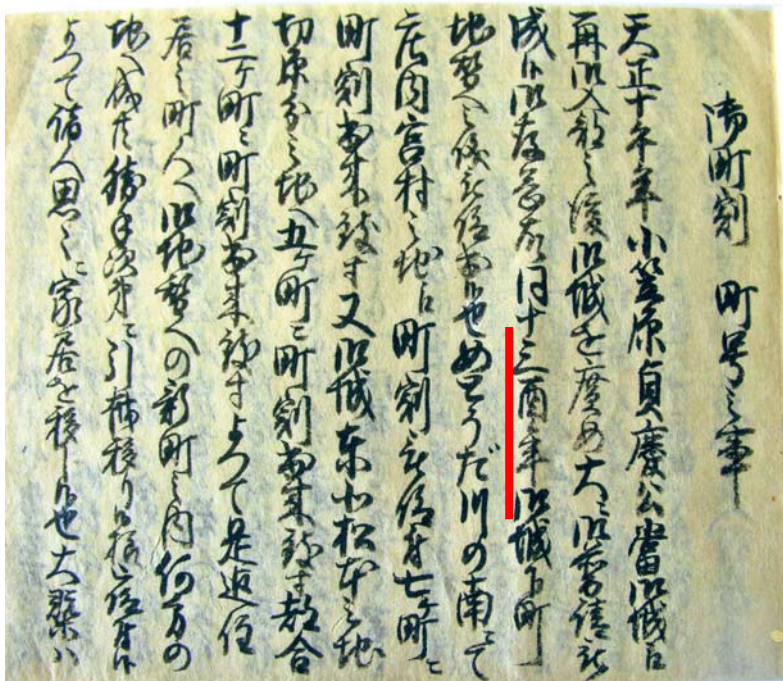
大名町側から千歳橋に向かって東側の橋のたもとに道路元標があるが、そのさらに東に左の説明板が取り付けられている。そこに女鳥羽川の名前の由来が書かれている。



浅間温泉を源流とする大六川が南に向かって流れ、その途中の「大村」の東に字「堂田」といわれる地字がある。古くはこの地に大寺がありそのお堂を維持するために税を免除された「免田」があった。そこを流れ下っていたので「御堂田川」とよばれ、民間ではそれがなまって「めどうだかわ」「めとうだかわ」といわれるようになったと考えられています。

川辺文書「松本記」は以下のように記している。

「天正十年、小笠原貞慶公 当御城へ再入部の後、御城を広め大いに御普請をなされ候 御存念ゆえ同（天正）十三年御城下町地替への儀仰せ出され候なり。 **めとうだ川**の南にて庄内、宮村の



地え町割り仰せつけられ・・・」と武田氏が滅び、1582年旧地を回復した小笠原貞慶が現在の地蔵清水辺にまだあった町屋を「めとうだ川」の南へ移したことが書かれている。

また新府統記には「その後深志を改め松本の城と号し、大いに普請を企て、天正十三年より 今の宿城地割して、同十五年までに、市辻・泥町辺の町屋残らず本町へ引き移し・」

とありこの記事と「松本記」の記事は一致している。小笠原貞慶が三の丸内の町人、すなわち非戦闘員を郭外に出したのである。ここに「めとうだ川」とあり、女鳥羽川の流路を変更した時期について、従来、小笠原貞慶説・石川数正説がありましたがこのことによって小笠原氏以前武田氏 32 年間の統治の間になされたと考えられるようになりました。

寛文 9 年（1669）水野家三代忠直が現在玄向寺の裏山に父忠職の廟所を作りました。その際廟所の上流に京都清水寺の「音羽の滝」に擬して「女鳥羽の滝」を作りました。このときより、御堂田川は女鳥羽の滝から流れ出る水が流れ下る川ということで「女鳥羽川」に変わったと考えられています。

一番良く知られた「享保十三年秋改^{あきあらため}信州松本城下絵図」には「女鳥羽川」と書かれています。（※享保 13 年は 1728 年）



（享保十三年秋改信州松本城下絵図）

上図で南総堀と女鳥羽川の間に土手状の直路が大手橋から大橋まで伸びていますが、これが縄手です。この縄手は南総堀と女鳥羽川を隔てる堤防（土手）として武田氏時代にその土木技術を持って作られたと考えられています。

近世を通じて女鳥羽川・縄手・南総堀は川南の町人地と三の丸の武家地とを敢然として分ける働きを持つとともに、町人地が火災の場合郭内に飛び火しないように「火除け地」としての機能も果たしていたと考えられます。また、南からの敵の侵入の際は直路の縄手は女鳥羽川を挟んで防衛のために土嚢を積んだ前線防衛ラインになったのかもしれませんが。

